

日本文学研究資料新集

8

秋成

語りと幻夢

有精堂

ISBN 4-640-32528-2

——日本文学研究資料新集——

8 ^{あきなり}秋成・^{かた}語りと^{げんむ}幻夢

定価 3500 円

1987 年 6 月 1 日 初版発行

編 者 ^{いな}稲 ^だ田 ^{あつ}篤 ^{のぶ}信
発行者 山 崎 誠

発行所 有精堂出版株式会社

〒 101 東京都千代田区神田神保町 1-39
電話 03(291) 1521 代
振替口座 東京 9-40684

Printed in Japan

ISBN 4-640-30957-0 C3393

『日本文学研究資料新集』（全三十巻）刊行に際して

日本文学の研究は、戦後四十余年を経て、隆盛に向かうかたわら、再検討と新しい方法への模索が様々に試みられております。情報化時代といわれる現在の状況のなかで、未来に開かれた日本文学研究を形成して行くためには、当然のことですが、従来の研究業績を正しく評価し、その基礎の上に新しい成果を積み重ねることを志向しなければなりません。小社ではそうした要請に答えて、『日本文学研究資料叢書』（全百巻）を刊行して、学界ならびに各方面から多大の御好評をいただきました。

右叢書は、既発表の研究論文のなかから、従来の研究に大きな意味を持っているもの、あるいは新しい可能性を開拓しているものなどを選択し、各時代・ジャンル・作家・作品ごとに論集として編集し、各研究分野の、基礎的・基本的な情報を、出来る限り有効に提供することを目標としたものです。こうした趣旨を継承しつつ、小社は新たにテーマ中心の論集として『日本文学研究資料新集』を刊行いたします。本集では各巻ごとにテーマを掲げ、より深く研究対象を掘り下げて、今後の研究の進路を導く羅針盤ともなることを切に願っております。

今や国文学界においても、多数、多種の情報が、錯綜し、混乱して伝達され、情報の氾濫が真の学問的交流の支障をきたすかのごとくになっていくようにさえ見えます。そうした錯綜の上に、老大な著作・雑誌・紀要等が続々刊行され、それらのうちのいくつかは、入手しようとしても、往々図書館にさえ具備されていないといったような、種々の困難が重なり、学問の発展を阻害する壁として立ち塞がっているのが現状です。こうした状況の中で、真に学問的なコミュニケーションを確保するため、本集は効果的な役割を果たす決意で新たに刊行されるものです。

日本文学の研究者、特に未来に伸びようとする若い研究者に、本集の趣旨が理解され、支持されて、永続的な事業として継続刊行されていく力を与えて下さる様に願ってやみません。

目次 ■秋成・語りと幻夢

幻話の構造・・・高田衛・1

——雨と月への私注——

夢想と創造・・・松田修・11

——秋成における作家的原点——

和訳太郎と当代劇壇・・・堤邦彦・21

——『世間姜形気』を中心として——

秋成の主題・・・百川敬仁・33

——初期浮世草子をめぐって——

〈白峯〉の造型・・・若木太一・48

——典拠からの遡源——

「浅茅が宿」の漆間の翁と法然上人・・・田口守・75

——作品成立の背景を探る——

『雨月物語』・・・青木正次・87

——その闇と光——Ⅲ

「女なんてものに」・・・矢野公和・109

——『蛇性の姪』私論——

典拠とテキスト・・・稲田篤信・129

——雨月物語の表現——

読本における主題と趣向・・・徳田武・139

——庭鐘から秋成へ——

「血かたびら」と寓そらごとの方法・・・中村博保・152

「天津処女」について・・・美山靖・162

宗貞出奔・・・田中優子・172

「宮木が塚」研究・・・木越治・183

『春雨物語』と和歌・・・長島弘明・196

——「宮木が塚」「歌のほまれ」を中心に——

秋成「魔仏一如観」の系譜……小椋嶺一・208

春雨物語……萱沼紀子・220

——創造性の停滞——

「茶神の物語」考……堺光一・225

——秋成の創作態度——

◇

解説……稲田篤信・243

参考文献……稲田篤信・252

◇

執筆者一覧……257

幻語の構造

——雨と月への私注——

高田 衛

ことは、ことは自身を裏切るといふ快感抜きで使用されない
時があるにちがいない。

わびぬれば身を浮草の根をたえて

誘ふ水あらばいなむとぞおもふ

文屋康秀が三河国に赴任するとき、小野小町と一緒に行かない
かと誘いかけたところ、小町の返事が右の歌であった。「誘う水
があれば行こう」と答えているようにみえて、「往なむ」に「否
む」を掛け、結局は拒絶の歌なのだ。こざかしいというにはしっ
とりとした情感があり、いい歌なのだが、「往なむ」という応諾
のことは自身に、みづから「否む」という逆の意味を持たせてし
まった作者の心には、すくなくともそうしたことばの快感を求め
て一匹の小悪魔が潜んでいたはずである。

その小野小町が、「天津処女」(春雨物語)の中に登場する。彼
女が清水寺におこもりした晩、隣りの方から凡ならざる読経の声
が聞えてくる。どうやらいま失踪中の良峯宗貞少将らしいと気づ

いて、一首を持たせてやった。

石の上に旅ねはすれば肌さむし

苔の衣を我にかさなん

「冷たい石の上で旅寝をしていると肌寒くてならない。あなた
の僧衣を貸して下さい」という意味だが、言外に隠しているあな
たの正体をちゃんと見せて下さいなといっている。

世をすてし苔のころもはただひとへ

かさねて薄しいざ二人ねむ

宗貞はこの返歌だけ残して姿を消してしまった。もちろんこの
話は『大和物語』の中の有名な挿話で、秋成はこの話をほとんど
歪めずに書いている。ただ原歌では「かさねて薄し」という句は、
「かさねば(重ねば)」と「貸さねば」を掛ける「つらし」であっ
て、この改変のため歌意はかなり違ってきた。「天津処女」では、
返歌の機智性よりは、「いざ二人ねむ」といいながら、即座に姿
を消してしまう宗貞の韜晦ぶりがくっきりと浮き出てくる。なぜ

か。『大和物語』と違って、「天津処女」では、宗貞の韜晦の失敗はただちに死に直結したからである。にもかかわらず、「いざ二人ねむ」という時、「天津処女」の宗貞の好色のなまなましさは、『大和物語』のそれとはくらべようがない。ことばは、その意味上の実体性を欠落するがゆえに、ことばとしてのエロスを肥大してしまうからである。それはウソという次元のものとは、ちっと違うのであった。

*

かなしいことに日常語につながる俗語のなかでは、そうしたことばの内面関係は今も昔も、ウソかマコトかという二元論に帰納されるから、秋成は処女作『諸道聴耳世間猿』の序でこう書いて。彼賢人の仲間法度に、偽めきし真はかたるとも、真くさき虚言はつかぬものとや。釈迦の蔵経、莊子の南華経、うそのまことの真のうそで、おもはくは我がころより出で、人の口にかはりゆき、粘となり、鰓となる。

浮世草子のことばは日常語から出て、それをい、だちの表現に活用したのが秋成だが、そのいらだちが「虚言」と「真」の両極感情のかたちをとり、ことばの奇態な二重心理として完全に置きまえられているのを知ることができる。およそ「真くさき虚言」ほど、「偽めきし真」と似て非なるものはないことは、この文脈にたとえば、「事実は小説よりも奇なり」という観念を適用してみればあきらかであろう。だが、ことばに関するかぎり、この似而非なるものは同一物の両面にすぎぬ。大蔵経千巻の教典も、遊戯三昧の莊子、内・外・雜篇十萬言も、すべて「うそのまこと

の真のうそ」とは、えらい居直りのようできて、じつはささやかなもの書きのことばへの不信以外の何者でもなく、「あやしうこそものぐるほしけれ」などと云わなかっただけ目つけものである。そういうことばの自立の奇怪を秋成は述べている。粘と鰓は天・地を洒落ていったまでで、我が心から出た「おもはく」も、「人の口にかはりゆき」、天・地にひっくりかえるという、ことばのアーキズムの快感はしよせん、はげしい焦躁となって作者にかえってこざるを得ぬという、もの書き特有の苦笑のあらわれであった。

こたわらなくてはならぬある一点を留保すれば、秋成の浮世草子のなかのそういうことばの性格を最初に指摘したのは保田與重郎氏であった。題して『近代文芸の誕生』と曰うとき、その『近代』はあまりに特異な概念で、わたしなど蹤いてゆけぬ。しかし、落語はどれをとつてもしよせん落語にしかすぎぬ、といった見方に比べれば、こうした特異さもまた珍重していいだろう。落語といえどもひとつひとつ違うのだ。すぐれた落語は言語芸術である。ドナルド・キーン氏の秋成論は、フェアであろうと努めた意図は認めなくてはならないが、ついに西鶴という天才に比肩しうる、秋成浮世草子の独自なことばの位置を読むことはしなかったようだ。

町人嶋屋仙次郎が浮世草子を書くときの筆名は和訳太郎という。駄々をこねる、悪戯をして人を当惑させる、という意味の上方語の「わやく」の中に、小説家秋成の出版を見たのが保田與重郎の秋成発見であったが、このことばにはもう一つの意味があった。

キーンが認めたくなくとも、あて漢字がそれなりの意味を持つのが、日本語の宿命的性格なのだ。たとえ反語的にであれ、「わやく」はまた和らかに古典や外国文学を訳（通俗化）することでもあった。もの書きの生命としてのことばが俗語と雅語、日常語と死語という二重な心性の自己矛盾の中に置かれていたという条件が、じつは西鶴と異なる秋成の文学的出発を宿命づけていた。

『諸道聴耳世間猿』の板行が作者三十三歳の春、書きあげたのは、そのかなり前であるとわたしは考えている。そして、このことばの自立の自覚を前提にすれば、『諸道聴耳世間猿』から『雨月物語』への距離は、考えられているほど遠いものではなく、わずかに一投足の間にある。『雨月物語』序の日付は作者三十五歳の春の年号が書き入れられている。出版がその八年後であるからといって、ひとつの作品の精神の日付がそれ以外の諸般の事情によるという考え方はある意味では姑息である。その日付は、作者の決定的変身の刻印であった。

*

「幸にして歌舞伎の草紙に似ず」と序にしるす『英草紙』。『俗に即して雅を為すの術』という麗々しい金龍敬雄の空語を序に掲げる『西山物語』。それらと『雨月物語』との最大のちがいは、ことばの二重な心性の自覚をめぐる精神世界のちがいであった。「和訳」という両義的な精神の痕跡を、たとえば人物の猥小性の特徴とする浮世草子的発想のかたちで、『雨月』世界の中に見とどけることはさほど困難なことではない。巻頭の「白峯」は冷酷な条理主義者西行法師を媒介にした崇徳院怨霊の怨念発露の

世界だが、それはまた血ぬられたわが国帝王の系譜のなかから、人間的個性（崇徳院）の猥小をあなぐりだすしわざでもあった。猥小性を私憤といいかえても負い目といいかえてもいいのである。その私憤が激しくはとばしつて歴史を血で塗るかえるという怖ろしさは、じつは『世間猿』序文の論理をかりれば、我がおもわくが、人の口を借り、天と地に横溢してゆく——という言語の自立過程にはかならない。逆にいえば、「可愛外に欲心魔王、崇徳院様ほど爪がのびて……」（世間猿一の二話）という猥小なる人間認識からの出発が、その言語過程を通して、逆に猥小を超えた稀有な「白峯」の心象世界を造型していったことであろう。

にもかかわらず、『雨月物語』における作者の変身は決定的であった。認識者が死語の世界にわけいったという意味において、それは良峯宗貞少将のたどった道に似ていたかもしれない。

「浅茅が宿」に、勝四郎という農夫が登場してくる。少し野暮ったい命名よりは北斎老人の先蹤かもしれぬ。生れは「下総国葛飾郡真間の郷」、つまり葛飾の郎だから勝四郎なので、これも一種のわやくであろう。彼はその性のゆえに零落した。おのれの性のゆえに零落したからには、貧乏承知かといえはそうではなく、「さるほどに親族おほくにも疎んじられけるを朽をしきことに思ひしみ」というのだから、人のさげすみを受けて発憤したのである。零落は甘受するが、零落ゆえの軽蔑に悲憤するというのは、心理の機微をついているけれど、結局それは世に愚かといわれる男にすぎず、こうした無能は、雨月世界の人物たちに一貫する特徴でもあった。こうした勝四郎の設定が浮世草子的発想につらな

ることは、話の展開がただちに「西鶴織留」以来の出稼ぎ失敗譚のボタンを踏むことから理解できる。

勝四郎は都下りの商人に同行を頼みこみ、残る田畑を売り払って、足利染の絹を商品として買いこんだ。発憤にひきつづくのは場当りのな行為というわけである。衝動的で思いつきじみており、前後の思慮なき軽率さであり、妻はそれを案じたが男のはやり立つ心を止めることはできなかった。不安なままに旅仕度を手伝って、その出発前夜、妻は男が早く帰ってくれるようにかきくどいた。すると男は答えた。

いかで浮木に乗りつもしらぬ国に長居せん。葛のうら葉のかへるは此の秋なるべし。

「知らぬ他国に長居する気はない。葛の葉の反る秋までにはきつと帰る」という意味内容には、話の進行をさまたげるほどに特殊なものとはひとつもない。だが、このひねくれた盆栽の松のような文章に、死語の組合せから成ったきわめて粉飾的あるいは人工的な印象は否定しがたいだろう。単直な「秋までに帰ってくる」という意味が、どうしてこのような死語的構成によって屈曲の表現たり得なければならぬか。秋成はこのときすでに幻語の道行をたどっていた。陰微な銜学趣味といってもいいのだが、わずかに三十六字のこの文を吟味すれば一種の悪意につきあたらざるを得ぬ。

*

問題は、古風な注釈学的小路に入るがしばらくこたわってみよう。

まず、「浮木に乗りつもし……かへる」という表現は、「源氏物語」(松風)のなかの歌、「いくかへり行きかふ秋を過しつつ浮木にのりてわれ帰らむ」を踏んでいる。これによれば「浮木」とは故郷に帰るとき乗物(舟もしくは筏)なのだから、他国に長居せずに帰るといふ述懐に見合っている。しかし一方、歌は幾度も去来する秋を過しての帰郷を詠んでいるのだから、その意味では「この秋までに」という文意とはまったく逆な意味が染みついているのが「浮木」ということばなのであった。もちろん、読者が文章からその出典や引歌までせんさくして読むかどうかは作者の知ったことではない。しかし読者の読みの深遠にはかかわらず、作者には自分のことばの出自がなければならぬ。「いくかへり行きかふ秋を過しつつ」という歌に出自する「浮木」ということばを採ったとき、作者はすでに「この秋までに」帰らぬという深層の意味を選んでいるはずである。結果的には勝四郎の帰郷は、妻もすでに死んだ七年目の秋であった。「浮木」ということばは、そうした結末と深層の意味において見合っていることになる。

同じことが、「葛のうら葉のかへる」という表現にもいえるであらう。葛はマメ科の大形蔓性草本、秋になると葉腋に花穂をつけ、白っぽい葉裏を反す。もともと「葛の葉」は「かへる」の序詞だけれど、「玉葉集」巻十四に、「秋風と契りし人はかへり来ず葛のうら葉の霜がるまで」という一首があり、もし秋成がこの歌を意識し、踏んだとすれば、この語の深層にもまた、「契りし人はかへり来ず」という逆意味が潜むことになるだろう。

『雨月物語』の注釈が少なからず厄介なのは、語の出自に関し

て右のような事情があるからなのだ。この例は中国小説の修辭が關係していないから、まだ案な部分なのだ。表層では「帰る」約束のことばとしての「浮木」も「葛の葉」も、語の出目を検討してゆけば「帰らぬ」意図に染色されていることに気づかざるを得ず、いわばこれらのことばは、「帰る」「帰らぬ」両意にまたがる不安と混沌のアイロニーによって成立しており、作者の真意なるものは、注釈学上は韜晦の中にしか存在していない。

いつの時代でも文章言語の自覚は、古典の意識なしでありえない。「詩文章ヲ作ルハ、屋宅ヲ造ルガ如シ。腹中ノ文字ハ材木ノ如シ。サラバコソ古エヨリ詩ニ用ユベキ文字ヲ詩材トイフ。文章ニ用ユベキ文字ヲ文材ト云フ。イカホドニ思フテモ、材木ナクシテ普請造作ノナルモノニアラザレバ、屋宅ヲ造ラント思ハバ、先ヅ竹木ヲ集ルガヨシ。詩文章ヲ作ラント思ハバ、マヅ其ノ詩材文材ヲ集ルガヨシ」という「授業編」の一節を引用するまでもなく、ことばの構築の思想は当時の文章言語の一般的前提であって、秋成の専売ではない。ただ秋成のことばの構築には、ことばの溶暗部にたいする幻視がある。それを実体化してゆくのも同じことばに他ならない以上、本質的に二重構造性をもつのだ。その時、ことばは多義性の宿命のなかで内発的に運動体である。「浮木」は浮気という語を呼ぶ媒体であり、かつ実体かもしれない。何か得体のしれぬ怖ろしいものがそこにある。「生」の不安という名の悪意のようなものが。

*

具体的に「葛の葉」についていえば、問題はまだ尽きぬ。「葛の葉」の語を有名にしたのは例の信太の森の狐の「うらみ」だが、葛の葉が裏を見せることから、裏見―恨みとつながるトリック的な縁語關係のおもしろさは、一面では、「秋風の吹き裏返す葛の葉の恨みてもなほ恨めしきかな」という「古今集」の恋の歌のように、古くからひとつの情緒の範疇を示唆する語でもあった。

恨みは葛の葉の、恨みは葛の葉の、帰りがねて 執心の面影の、恥かしや 思ひ夫の、二世と契りてもなほ、末の松山千代までと、掛けし頼みは徒波の、あら由なや 虚言や、そ

もかかる人の心か。

世阿弥の名曲「砧」の一節である。秋の帰国を誓った夫は三年を経ても帰らず、待ちあぐねて死んだ妻の、亡霊と化してつらねるうらみのことばだ。「葛の葉」はまた恨みの序詞でもあったのである。そして、秋成の場合「玉葉集」の歌はともかく、「砧」の詞章を採ったことは他にも証拠があつて動かしがたいのである。してみれば、「葛のうら葉のかへる此の秋」というささやかな表現は、三次深層的にそれが「恨みの秋」であることをみづから示唆していることになる。

以上は注釈学的には限られた平凡な手づきによって、つまり出典を予想し、掛詞・縁語・序詞といった死語的約束を解説するという程度のこととしたまでである。しかし、たったこれだけの作業から何が導かれたであろう。先述したように、物語はすでに西鶴いらいの出稼ぎ失敗譚のボタンに沿って進行していた。作者の個人的事情をいえば、同形のプロットは前作『世間妾形氣』で

経験している。読者は、男が帰らない可能性を読んでいる。とりあげた僅か二文節、三十六字から成る文章は、そういう所で読者に出逢うのだ。さらにいえば、「浅茅が宿」の前章「菊花の約」は、かりそめの約束に生命をかける信義の物語、いわば「帰って来た」死者の話であった。秋成の死語の内部深化的構成の方法が輪廓づけてくるものが浮びあがってくるだろう。

勝四郎の帰郷の約束は、ことばの自立的機能において、この一章の真実の主人公、つまり、妻の宮木の側から読まれることになり、男の違背、変節、虚言、そしてそれへの恨みのモチーフのアイロニーでしかなかったといっても云い過ぎではないのである。しかもそれはことばの背後の無限な不安と混沌の世界への溶暗的機能によって、かえってことばとして実体化されてくる。

恐怖さえ感ずるのは、このたった三十六字の文の表層意味が、薄く張られた皮膜にすぎないことだ。いったん、この一枚の皮を剥けば、おそろしく不吉な逆意味や呪詛が臓物のように流れはみ出してくるという、その構造なのだ。『雨月物語』が怪異談であるのは、幽霊や精霊が登場するからだけではない。

*

死語たちは厳然たる秩序のなかでは詩語として再生する。逆意味や呪詛が、ことばの表層の皮一枚を剥けば露出するといったのは比喩にすぎぬ。『雨月物語』の貪婪な死語たちの世界は、けっして魚のように臓物をはみ出しはしない。三島由紀夫氏が、「非感性的な美の追求」をいい、「冷たい非感性的な文体」、「完全な人工美」をいったのは多分その所である。

「夢應の鯉魚」を受した三島は、鯉身の僧侶の目に映る琵琶湖の風光の文章をとりあげて、「秋成の企てた究極の詩」という。その鑑賞はすぐれてレベルが高くあざやかだ。そのエッセイは完結したひとつの作品であるだけでなく、国文学者にたいしていまだに豊かな示唆を投げかけている。しかし、中村博保もいうように、三島はどうやら自己の小説の原理によって秋成を裁断したのには是非もない。

勝四郎と宮木の物語が、すでに「菊花の約」から始まっているように、「夢應の鯉魚」の琵琶湖の水は、「浅茅が宿」の末尾の真間の手児女の投身した水につながっている。勝四郎と宮木の物語で、美しい古代処女の入水自殺の話は確実に分裂した突然の幻影だった。灌頂の儀式のように水の女の幻影が、あるいは水の中の透明な光の屈折が、かたくなに愛慕にとらわれて死んだ宮木を浄化するために必要だったのだが、鯉身の僧侶の話はそこにすでに始まっている。

琵琶湖の水底はまた、「杳はろの底」、冥府として、次章「佛法僧」の修羅亡者のひしめく深夜の高野山に連続している。山と水底の究極の重層感覚は、アヅミ族の径路などを通して民俗学が指摘した日本の古代感性的のひとつ。「佛法僧」の摩尼の御山は鯉身の僧侶に代えて、俳諧をたのしむ老人を、鯉身に代えて仏法僧鳥このはづくを組み合せ、「杳冥」にのぼりつめた水中世界でもあった。

厳然たる死語たちの秩序というのは、『雨月物語』の心象的展開のこのような関係をさす。ことばはその内面で、自己分裂の危機を秘めつつ、二重三重の深層意の複合生命体であった。そのか

ぎりていえば、ヌーボーロマンの言語実験に似て、ことばの多義的伝統に根ざす、文章言語の可能性への知的な構築作業とみることは可能である。しかし、その外面に形成してゆく秩序は認識者の予感の苦悩に彩どられているといつてよい。

「夢應の鯉魚」の琵琶湖の風光は、「究極の詩」かもしれないが、夢の中の分身という主題に沿うた、凄惨な生の被害的現実として書かれている。水中の明るく美しく美しい文章は、暗澹とした幻視者の被害的心性を焼きつけて、陽転した陽画^{ポジ・フィルム}であった。でなければ、鯉魚の僧は次の瞬間に、顔見知りの漁師に釣り上げられはしないであろう。知り合いのだれかれの哄笑の中でなますにされることはないであろう。人の世界の相互的な意志不疎通予感のリアリティが、古代処女の入水をひきついで、死語たちの秩序を死と生の間の放浪の物語に統べていったのだ。

水の秩序は、高野山の山中を経てまだ流れつづける。水は霊界の自然的構想であり、意志不疎通の世界である。

此の二人忽ち躍りたちて、滝に飛び入ると見しが、水は大虚^{おほはく}に湧^もあがりて見えざるほどに、雲摺墨^{すゑすみ}をうちこぼしたる如く、雨篠^{あめ}を乱してふり来る。

(蛇性の姪)

「此の二人」とは妖女とその腰元をいう。狂奔し、沸騰する水は、「夢應の鯉魚」の美しい風光が歯を剥いて人間界に反逆する構造におかれている。「大虚^{おほはく}」とは何だろう。この語は死語というよりは空語に近い。ことばが架空の現実を出現させるのだ。それは「雨月物語」における「雨」の由来を示唆するのである。

*

幻語の構造が幻語の方法につながるのは当然である。その意味では青木正次氏の「雨月の夜」(日本文学・昭和四六・一月号)は興味ぶかい見解を示していた。それはさておき、「雨月物語」の題号の出所については、慎重な思索がすでに幾つもある。いま、それを紹介しようというのではないが、どちらにしても直接の出所は作者が、自序にみづから記すところであった。

明和戊子の晩春、雨は霽れ月は朦朧の夜、窓下に編成して

……

朦朧たる月の夜は、夜になって上がるまで降りつづいた雨の一日に連続したのであらう。その雨の一日はつい昨日のごとく冬にながっていたであらう。冬は歳の余、夜は日の余、陰雨は時の余、これを「三余」といって、学問文事はこの三つの余暇をあてれば足りるという中国文人の考え方だが、それはまた発展期の近世上方商業資本主義下に筆を執るものの市民的良識であった。秋成は三余斎と名のり、自序の「晩春雨霽月朦朧之夜」はこの三余の良識を踏んだことばである。しかし、秋成の署名は三余斎から「余斎」(余計者、この世のはみだし者)と転じ、最晩年には「天罰七十余斎」(死にぞこないの罰あたり)に変つていった経緯を考えても、「三余」に良識をいえば、秋成は笑うだろう。自序は述べている。

則ち之を摘読する者も、固^{もと}より当に信と謂はざるべき也。豈^{あや}醜唇平鼻の報を求む可^べけん哉^や。

「この物語を真実と思う読者はあり得ない。どうして水滸伝作者のごとく、片輪者が生れるという報いが得られるのか」という、

もってまわった表現は、『雨月物語』が虚談閑話、仮構の世界であることをぶざまなまでに力説していることであり、『三余』はその良識と背中合せに、いわばそこから分裂の許された幻想・幻量の時間（余暇）をさしているのだった。作者はすでに「醜唇平鼻の報」を受けた片輪者であったことを忘れるべきでない。

そのとき、雨と月は怪異出現の刻に転化するだろう。人も知る「牡丹燈記（剪燈新話）の「天陰雨湿之夜。月落參横之晨」という現世と幽界の交叉する時間のように――。

「雨」と「月」は魔術語である。勝四郎・宮木の物語では七年目の帰郷はこう語られる。

此の時日ははや西に沈みて、雨雲はおちかゝるばかりに闇けれど、旧しく住みなれし里なれば迷ふべうもあらじと、夏野わけ行くに、いにしへの継橋も川瀬におちたれば、げに駒の足音もせぬに、田畑は荒たきまゝにすさみて旧の道もわからず、ありつる人居もなし。

そして勝四郎が宮木（幽魂）と過した一夜は、「有明月の白みたるも見ゆ」とあけてゆく。「雨」と「月」とにはさまれた時間は、何の時間であつたろうか。「吉備津の釜」の磯良のすさまじい復讐は、幽魂を超えた魔的超絶の時間を問う必要があるが、その時間、

松ふく風物を僵すがごとく、雨さへふりて常ならぬ夜のさまに――。

という文章と、

明けたるといひし夜はいまだくらく、月は中天ながら影籠

くとして、風冷やかに――。

という文章にはさまれた文脈でもあった。「蛇性の姪」の豊雄が妖女真女子に逢ったのは、「けふはことになごりなく和たる海の暴に東南の雲を生じて、小雨そぼふり来る」という「雨」の中である。

*

意志不疎通にして、不可知なる霊界を導入するのが「雨」であるとすれば、「月」は現世の明暗であり、光と影である。幻語の方法は光と影を不可分化して、ことばはそれじたいに明暗二相のなかの浮沈に生彩を放つ。

月の光も山の際に陰くなれば、今はとて戸を閉て入らんとするに、たゞ看。おほろなる黒影の中に人ありて、風の随来るをあやしと見れば赤穴宗右衛門なり。

「菊花の約」の亡霊出現を述べる「黒影」はじつは光量である。う。「青頭巾」の鬼の乱舞する山寺は、「夜更けて月の夜にあらたまりぬ。影玲瓏としていたらぬ隈もなし」と書かれる。「影」こそ月光なのである。「夢應の鯉魚」の琵琶湖の風光でも、「ぬば玉の夜中の渦にやどる月」とは、暗黒と清光との同居であった。光の陰影はこまやかである。「十日あまりの月」（白峯）、「有明月のしらみて残る」（浅茅が宿）、「七日あまりの月」（吉備津の釜）「月は中天ながら影籠々として」（吉備津の釜）。

照しだされるのもとより夜の世界だが、光と影が逆転し、現実（昼の世界）に襲いかかる夜は、昼よりも明るいのだ。

時に峯合ゆすり動きて、風叢林を僵すがごとく、沙石を空に

巻上る。見る／＼一段の陰火君が膝の下より燃上りて、山も谷も昼のごとくあきらかなり。光の中につら／＼御氣色を見たてまつるに、朱をそゞぎたる龍顔に、判の髪膝にかゝるまで乱れ、白眼を吊あげ、熱き嘘をくるしげにつがせ給ふ。

「白峰」の闇黒が、白光の世界に転じたとき、死語たちはいっせいに色彩を復活する。「熱き嘘」は実は死語たちの呼吸だ。認識者の予感の秩序に雌伏していた死語たちは、光と影のなかで蜂起する。「月」はその媒体で、実体かもしれない。同じような構成を「青頭巾」の鬼の運動に見ることができし、「吉備津の釜」の正太郎惨死の場面、「やゝ五更の天もしら／＼と明けわたりぬ」にも見ることができる。それはじつは夜の暗冥であった。おぼろな月が中天にかかる暗い世界の詐術であった。

*

幻語の方法は、死語を凶暴化する。作者が命をかけて韜晦せざるを得ないのは、ことばの反逆的自立過程に対応する作者じしんの非自律的自己であつただろう。危険思想よりもおそろしいのは幻語の自立の凶悪さであることを知るのはおそらく作者だけである。

「貧福論」は『雨月物語』九編の末尾であり、その批評的性格において特殊である。なぜならば、その批評は具体的な対象によつて成立したからである。「明和戊子晩春、雨霽月朦朧之夜」に筆をとどめたのは、おそらく編次のとおりに、この「貧福論」であつたであらう。岡左内は、同年二月に刊行された、『西山物語』

の主人公、大森七郎という人物にたいする批判を契機に対比的に形象した者に他ならないからである。同時に『西山物語』の「たから」（金銭）観に、秋成は現代に無媒介にのめり込む死語たちを見、それは文字通りのことばの残骸の醜態であつたから、激怒した。「貧福論」の黄金精霊は、『雨月物語』の中では唯一の不可知的、意志不疎通なる世界からの人間界への語りかけであつたのは、『西山物語』の貧福の論理を破砕するという目的があつたからで、ここに後年の宣長との論争における秋成の立場の原型を見ることができらう。

しかし、幻語の方法は自足的に、この具体的なモチーフを超えてしまふ。その方法がモラリストと美学者の分裂を、ことばの創出の契機にしていたからといつてもよい。「雨月物語」のなかに循環する死語たちの秩序は、巻頭「白峯」の世界との連続・重層することばの世界を形成していったからだ。たしか「不毛なる対話」「交錯するモノローグ」といういい方で秋成の言語構造を指摘したのは松田修氏であつたが、これは「白峯」の幽冥境位を異にする崇徳院怨霊と西行との間では、その意志不疎通の構想は、あたりまえのことではなければならぬ。「血かたばら」（春雨物語）になつてくると、歴史の文脈の中に置きかえられて、違った意味を持つのだが、それはさておき、「貧福論」は意志疎通の対話というパタンの位相で、「白峯」の意志不疎通の対話を喚起する位置の形成を持たねばならなかつた。

『雨月物語』九編の序列は血液交換によつて展開し、循環するのであつて、「白峯」と「貧福論」が首尾相応するのは、循環的

に隣接する関係からであって、直線上の首尾の呼応ではない。いかにしても、その循環の中に凶暴性を秘める幻語を閉じこめることが、作者の現実的な身の安全保証だからである。たとえば、前章「青頭巾」と「貧福論」をつなぐ血液交換のパイプは、詩偈による悟りという趣向であった。

だが、作者の苦心は逆な結果を招いた。太平の徳川治政をことはいで結ぶという、近世小説の約束にもとづいて、『雨月物語』五巻をめでたく大団円に締めくくり、しかも「白峯」の対話世界に水脈をつないだとき、『雨月物語』は、稀にみる完成度を持って成立した。その完結性は続編を許さなかったが、幻語の自立が作者に痛烈に復讐したのである。

秋成は、「貧福論」を当世祝福の詩偈で結んだ。

堯堯^{きやうきやう}冥日^{めいじつ} 杲^{こう} 百姓^{ひやくしやう} 婦^{いへ}家^{による}。

「帝堯の代に生えた太平の瑞草が育ち、万民は家に帰って安らかであろう」という意だが、家が徳川家康をさすことはあきらかである。意味上、祝意以外の何ものもないことも明白であるが、ひるがえって考えれば、大坂冬の陣のきっかけとなった「国家安康」という方広寺の鐘銘とこの詩偈はどれほどの違いがあるのであろうか。ことばの多義性は現実の歴史において、大民族の自滅の因であったのである。そして、それは物語の循環の論理上、巻頭の「白峯」、滅ぼされたものの呪詛と怨念の世界に重層する。

「明和戊子晩春」という日付を、あれほど明確にのこしながら、『雨月物語』の板行はその八年後であった。そして、自らを語るにあれほど多弁な秋成は、生前ただの一度も『雨月物語』の作者

であることは名のらなかったのだった。『春雨物語』の良峯宗貞の示唆するものは大きいといわねばならぬ。

〔「別冊現代詩手帖」第1巻第3号、昭和四七年一〇月発行〕